

全国草原再生ネットワーク

草原がつなぐ人・自然・文化

＜発行＞全国草原再生ネットワーク
<http://www.sogen-net.jp/>

ニュースレター

vol.14

(Apr., 2013)



指導を受けながら火入れをする中学生の2人
山焼きの技術が、実践を通じて引き継がれてゆく（2012年4月広島県雲月山にて）

■全国版ヒヤリハット集作成について

(事務局)

春は野焼きの季節、皆さんのフィールドの草原では無事野焼きを終了することができましたか？ 4月以降に予定しているところもあり、全国的にはまだまだ予断を許さないところです。

さて、事務局の所在地、島根県大田市にある国立公園三瓶山西の原の野焼き（33ヘクタール）は、3月23日に終了しました。当日は立ち上る煙がまっすぐ上がるほど風もなく順調に野焼きが進んでいきましたが、火が広がるにつけ風を呼び、最後には迎え火が間に合わず、待機していた消防車の放水で難を逃れました。まさにヒヤリ・ハットの状況でした。

草原維持には野焼き・草刈りは欠かせないものです。これらの作業は自然を相手とするため、観天望気を備えた方々の知恵と経験が必要になります。しかし、高齢化する経験者頼みではこれを継続することはできず、全国各地でボランティアの参加を交えた作業が多くみられるようになりました。細心の注意を払っても常に危険と隣り合わせであることは紛れもないことです。不幸にも、ここ数年で野焼きに関わったボランティアの方が数名お亡くなりになっています。事態を重く見た公益財団法人阿蘇グリー

ンストックでは、全国に先駆けて「阿蘇版 ヒヤリ・ハット集」を作成し、警鐘を鳴らしています。これに呼応し、この度、全国草原再生ネットワークでは会員・会友の皆さんのご協力のもと、野焼きなど草原維持作業に関わる「全国版 ヒヤリ・ハット集」を作成することに致しました。

つきましては、平成24年度または、これまでの作業で生じた事故、または事故に至らなかったものの、事故の一步手前で「ヒヤリ」または「ハット」した事例を集めたいと思います。ご協力願える団体がありましたら、是非、事務局までお申し出てください。



阿蘇版の
ヒヤリハット集

■各地からの報告

阿蘇草原再生募金の取組みから見えてきたコト～第1期から第2期へ向けて！～

(阿蘇草原再生募金事務局)

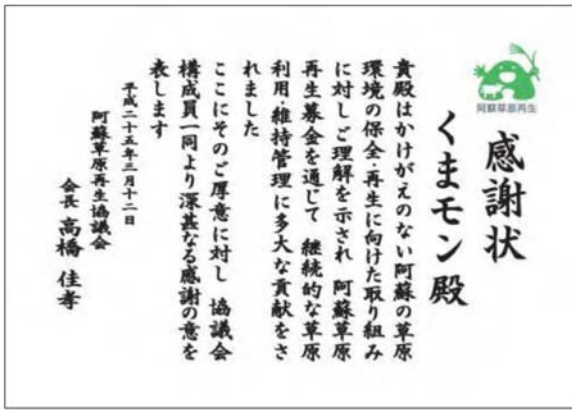
「阿蘇草原再生協議会」(会長は高橋佳孝氏、2013年3月現在の構成員は234個人・団体)では2010年11月に『阿蘇草原再生募金』を創設し、第1期として2013年3月までの約3ヶ年弱の期間に1億円を目標に立てて取り組まれてきました。

この取り組みは、「千年の草原」と言われる阿蘇の広大な草原が、「野焼き」「放牧」「採草」という人と自然の営みによって維持され、しかもさまざまな恵みをもたらす世界に誇れる国民共有の財産と捉えて、次世代にしっかり受け渡していくことを目標に掲げてきました。同時に、草原で営まれる畜産業の衰退や後継者不足は年々進行し、近い将来草原が草原でなくなる事態が来る、という大きく深刻な危機感に迫られたものでもありました。

この募金の取組みにあたり、「阿蘇草原再生千年委



第1期募金の締めくくりとして、3月24日熊本市内で取り組んだ街頭募金会場で、感謝状を「くまモン」に贈る高橋会長。右は立ち合い人の「阿蘇のあか牛」くん



感謝状の文面。実物はススキの紙漉きでできている
 員会」(委員長は米澤和彦氏、熊本県知事をはじめとする行政、経済界、報道機関、学識経験者、消費者団体などの代表 13 名と事務局で構成)が発足し、普及啓発を含めた阿蘇草原再生の恒久的なしくみづくりの検討や、世界文化遺産登録推進の応援などを行ない、協議会の全面的な応援団・旗振り役を果たしてきました。

こうした協同・連携した取り組みによって第 1 期募金は本年 3 月 31 日現在で約 7,000 万円に至りました。同時に草原再生に向けた活用も始まりました。2011 年から毎年約 1,500 万円程度を活用して、草原を守るさまざまな事業や活動を募集し、緊急的な分野から優先して 2013 年度までに亘り合計 4,000 万円以上が活用されてきています。具体的には①繁殖あか牛導入、②野焼き放棄地の草原再生、③野焼き支援ボランティア活動の運営管理などが柱になっています。これには「1. (草原再生が目に見えるような)阿蘇の草原保全につながること 2. 地元が元気になること 3. 募金者にわかりやすいこと」を基本原則に、第 3 者の募金委員会の助言を受けながら、審査決定されてきています。

その結果、2011 年度の繁殖あか牛の導入頭数は 2010 年度対比で 3 倍弱も伸びたり、年間のべ 2,000 名を越える野焼き支援ボランティア派遣活動を支援したり、野焼き放棄地の再開を 3ヶ所約 30ha の実現や、阿蘇地域の 38 小中学校給食にあか牛肉を提供したり、草原学習 DVD の提供などさまざまな面に広がってきています。

一方、「阿蘇草原再生千年委員会」では発足以降の議論と活動を積み重ねて 3 項目の提言が、2 月に採択され発表されました。①草原減少の歯止めのための地域産業振興と担い手育成、②恒久財源の確保、③阿蘇の世界文化遺産登録の早期実現の応援と観光

振興が、骨子でした。

こうした活動に至る中で、熊本県としても草原維持・再生を直接推進する政策への転換が図られてきています。これに民間企業・団体も呼応し募金をはじめ、さまざまなカタチでの協力の輪が広がり始めています。

草原維持・再生の機運は確実に醸成されてきていると言えますが、しかし、地元の草原を維持する担い手の高齢化は急速に進みつつあり、危機はますます深刻です。また、募金活動も含めてまだまだ活動範囲は熊本県内に留まり、九州への広がりが望まれています。そして、恒久的な仕組みづくりや世界文化遺産登録に向けた取り組みはさらに加速させる必要があります。

こうした状況を踏まえ、第 16 回阿蘇草原再生協議会(3月12日開催)では第 2 期募金に取り組むことが承認されました。取り巻く状況は厳しい中、新規構成員は毎回増加しておりさらに活発な活動が期待されます。

それぞれの構成員の願いや協議会に寄せられる期待感などを強固なエネルギーに転換して、相互に連携した活動の推進を通し、目標実現に一步でも近づいていけるよう推進していきたいと考えています。



地元熊本日日新聞記事より抜粋

いにしへの石見銀山の景観を考える シンポジウム

(和田譲二：NPO法人緑と水の連絡会議事務局長（石見銀山の景観を考える会）)

2013年1月30日 島根県大田市ゆきみーるにて、「石見銀山の景観を考える会（代表 黒田乃生 筑波大学世界遺産専攻）」の主催で「いにしへの石見銀山の景観を考える」シンポジウムが開催されました。

石見銀山が2007年に世界遺産に登録された時には、緑のタイムカプセル（日本の森林環境）が中世の銀生産遺構を守ってきた点が評価されました。世界の他の鉱山が大規模な露頭掘りの結果、植生を失い遺構を流失してしまったことに対比してその特殊性が高く評価されたわけです。しかし、現地ですべての山の様子を見てきた私たちにしてみれば、里山的土地利用がなされなくなり、竹林が拡大し遺跡を覆い尽くしている現状を前にして、どう受け止めればいいのかとまどっているところもあります。

いったい銀の生産で栄えていた時代の石見銀山の山野はどのような姿であったのか？ それがどのように移り変わって今の姿になったのか、根拠をもって語る人はいまのところいないようです。そこを明らかにしていく第一歩としてこのシンポジウムを企画しました。

このたびのシンポジウムでは、景観植生史を専攻としている京都精華大の小椋純一氏を講師として招き、科学的・人文的にあらゆる手法を駆使して、過去の植生景観を復元する手法を学びました。戦後なら空中写真、明治以降なら地図の植生記号、絵葉書写真、古絵図あるいは文芸作品の描写の解析、樹木の年輪を解析する手法、花粉分析など。こうした手法を組み合わせることで相互に検証することにより確か

められるということが示されました。

パネルディスカッションでは石見銀山資料館館長 仲野義文氏により、文献資料からみる近世の石見銀山周辺の森林資源の量とその利用の状況が語られました。

三瓶自然館サヒメル学芸員井上雅仁氏からは、石見銀山遺跡内の森林植生の現況と、仲野さんの資料により江戸時代に「草山」の面積が大きかったことを確認しました。

続いて全国草原再生ネットワーク理事の白川勝信氏が中国地方の草原面積が極度に減少してきたことを示し、今日的な草原の価値について語りました。

最後に竹林景観ネットワーク事務局長の鈴木重雄氏が、銀山地区での竹林の現況調査をふまえて、なぜ石見銀山に竹が多かったのかの考察が示されました。

いにしへの石見銀山の景観とひとくちには言えない歴史段階ごとの「景観の階層性」、それぞれの残像が今に残っているというまとめとなりました。

地元の観光ガイドの方や行政関係など、平日の昼間開催にもかかわらず多数の方にお越しいただき、バイオマスを徹底的に利用していた江戸時代の生産と生活の姿を共有できたことがひとつの成果だったと思います。現実に世界遺産地区内の植生景観を保全管理していくための指針をここから導き出していかなければならないと考えています。

なお、当日の内容を地元ケーブルテレビで撮影した60分番組のDVDを、頒布いたします。全国草原再生ネットワーク会員1000円（送料込）、会員外2000円（送料込）お申し込みは事務局まで。



小椋純一氏による講演の様子



パネルディスカッションの様子

そうふけっぱらのキツネを守ろう

(小山尚子：亀成川を愛する会)

「ひれ～ひれ～あのそうふけっぱら（草深原）が……」と始まる民話「そうふけっぱらのきつね」。菓子屋のおやじが菓子の仕入れから帰る途中、キツネに化かされるというお話です。味わいのある方言で語られる民話は、どう化かされたのかよくわからない、読んで化かされたような気になる、不思議なお話です。この民話の世界が、キツネも含めて風景ごと残っているのが、千葉県印西市を流れる亀成川（かめなりがわ）の源流域、千葉ニュータウン 21 住区です。江戸時代の牧（将軍の馬の放牧場）を彷彿させる松林や、オミナエシの群落、多種多様なトンボや水鳥が遊ぶ水辺、全国的にも希少な草地性植物の群生地など、首都圏では類を見ない生き物のサンクチュアリが出現しています。



かつて、そうふけっぱらの一部だったこの場所は、千葉ニュータウン事業地として 40 年前に在来の林を残して造成後、草刈管理だけが継続された結果、50ha の草地として残ったのです。谷津に水がたまった池と周辺の樹林の貴重性は、事業施工者の UR 都市機構が、私たちの要望に応える形で、専門家による検討委員会を設置したほど。でも水辺の周りに広がる草地が、注目を集めるようになったのは、日本自然保護協会の方をご案内してからです。貧栄養の裸地がすごい！というのです。ヒンエイヨウのラチ？一般人にはとうてい重要とは思えない響きです。

その結果、高橋佳孝会長をはじめとする全国草原再生ネットワークの皆様が視察に来てくださるなど、この場所の重要性が再評価されました。昨年 6 月には、このニュースレターでも紹介されましたように、



シンポジウムの様子

日本自然保護協会との共催により、シンポジウム「いのちを育む印西の原っぱ」を開催しました。また、キツネに出会う里山散策シリーズを二か月に 1 回のペースで実施して、この地域を一般にアピールするとともに、去る 2 月にはシンポジウム第 2 弾として「奇跡の原っぱ そうふけっぱらのキツネを守ろう」を開催しました。地元で民話を語り継いでいるボランティア団体ささの会による、冒頭の民話「そうふけっぱらのきつね」の素話（語り聞かせ）のあとは、金子弥生東京農工大学准教授の講演「里山にすむキツネ」など、興味のつきないお話がありました。すっかりキツネの魅力にとりつかれた満員御礼の会場からは、キツネもいる生態系を守るためにぜひ行動したいという声が上がりました。

そんなわけで、私たち亀成川を愛する会では、署名活動を始めました。キツネに化かされる世界を次世代に残そうという活動にどうぞご支援をお願いいたします。詳しくはホームページをご覧ください。

<http://www.kamenari-love.com/news.html>



そうふけっぱらに現れたキツネ

菅生沼の火入れと自然

(増井大樹：東京都在住)

2013年6月29日に行われる、全国草原再生ネットワーク総会のエクスカージョンで訪れる予定の菅生沼について、その歴史や、現在の活動についてお伝えします。

○菅生沼ってどんなところ？

菅生沼は、利根川支流にある南北5キロの湿地で茨城県の南西部に位置します。茨城県が指定する自然環境保全地域の中で最大の面積（約232ha）であり、現在まで、湿地の環境が保全されている場所です。菅生沼の大部分はヨシやオギなどの植物が生える湿地で、約500種類の植物が生育しています。また、コハクチョウやカモ類の越冬地としても有名な場所です。

○菅生沼の火入れの歴史

かつては、菅生沼周辺では火入れは柴焼き（柴っ火事）と称し、旧正月ごろに行なわれていました。また、カヤ刈りや沼の藻を採り肥料として利用していました。現在では火入れもカヤ刈りも沼の藻を採ることもなくなったことから植物等が沼に貯まることで陸化し、水面の面積は小さくなってきています。

現在行われている火入れは、地域の方が伝統的に行ってきたものではなく、植生保護のために新たに行われるようになったものです。

菅生沼のほとりにある茨城県自然博物館では、2003年から菅生沼の火入れに取り組んでいます。火入れを再開する前は、地域住民の一人がゴルフの練習をするために“勝手に”草刈りを行っていたそう

で、そのおかげで、希少な植物が保全されていたのかもしれない。

現在では博物館によって菅生沼に生育するタチスミレをはじめとする希少な植物を保全するために火入れを行っています。博物館が主体となって火入れを行っているという点では、全国でも珍しい事例かもしれません。

○菅生沼の植物

菅生沼のタチスミレ生育地はオギの優占する群落であり、群落にはオギ、タチスミレのほか、ホトケノザ、ヤエムグラ、ヌマトラノオ、ツボスミレ、ヨシ、セリなどが生育しています。そのほか、絶滅危惧植物に指定されているハナムグラ、トネハナヤスリ、最近少なくなったといわれるアリアケスミレなどが見られます。絶滅危惧植物は全部で17種類確認されており、そのうちトネハナヤスリ、エキザイゼリ、タチスミレは全国的にみても利根川水系に分布が偏っている種で、菅生沼の立地の特徴をよく現しています。

○菅生沼の現在の管理

博物館が行なっている火入れは菅生沼の中の約2haほどの広さの場所です。菅生沼での火入れは毎年1月後半に行なわれます。この火入れは博物館の行事として行なっているため、地域の方をはじめ多くの方が参加します。火入れの前の防火帯の草刈りを行い、その後火入れを行うという段取りで行っています。周囲は道路と河川で囲まれているため安全に火入れを行うことができます。ここ2年は火入れができなかったため、草刈りを行い、火入れと同様に地上部の植生を除去する作業を行っています。

火入れ以外の管理は基本的には行っていませんが、博物館ではタチスミレ等の植物の観察会を行っており、5月下旬には白くて可憐なタチスミレの花を見ることができます。エクスカージョンを行う予定の6月下旬でも、まだタチスミレの花を見ることができるかもしれません。関東平野に残る希少な火入れ地である菅生沼にぜひ皆さんも足を運んでみてください。



菅生沼の火入れの様子（2011年）

■「全国草原リレー」(第4回)

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで、各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第4回は、理事でもある熊田氏に、霧ヶ峰での取り組みを

紹介して頂きます。今回の執筆者が、次回の執筆者へと原稿をリレーしていきます。

■長野県 霧ヶ峰■

(熊田章子：霧ヶ峰ネットワーク)

霧ヶ峰は長野県のほぼ中央、諏訪地域にあります。標高 1,600~2,000m の亜高山帯に位置し、約 2,300ha の草原が広がっています。植生はススキやササを中心とした二次草原と、カラマツやドイツトウヒなどの植林、レンゲツツジなどの低木が中心で、谷筋にはズミなどが生育しています。

霧ヶ峰の草原の歴史は、わかっているだけでも鎌倉時代からにさかのぼります。諏訪大社に伝わる「諏訪大明神絵詞」の中で、各国の武将が諏訪大社下社の奥宮である「御射山神社」(八島ヶ湿原の南側にある現在の旧御射山神社)に集い、草原で狩りや白拍子が舞をする様子が描かれています。人が採草を行う場所として利用してきた歴史も含めると、地域にとってかかわりの深い場所であったことが伺えます。



毎年 8 月 27 日 (旧暦 7 月 27 日) に
行われる旧御射山神社例祭

さて、現在の霧ヶ峰の草原の人や生活との関わりはどうか。ご存知のとおり、霧ヶ峰は、初夏のレンゲツツジ、夏のニッコウキスゲ、秋のマツムシソウやススキ原、冬の雪景色やスキーなどの魅力によって、多くの人を訪れる一大観光地となりました。また陸上などの高地トレーニングの場所として多くのアスリートが利用します。

一方で、他の地域の草原と同様に、草原環境は変化してきています。特に、草原の森林化(遷移)については、諏訪市が雑木の除去や火入れ等の対



雑木の除去の様子

策をとっていますが、2,300ha という広大な草原を保全していくためには、関係市町や機関と連携した長期的かつ計画的な対策が望まれます。最近では、少しずつですが、私が霧ヶ峰を初めて訪れた 18 年前と比較しても、雑木が少なくなるなど、目に見える形で成果があらわれています。また地元の牧野組合では、雑木の除去のほか、改良草地の野草地化(花畑プロジェクト^{*1})やニッコウキスゲ群落の再生活動など、積極的な活動が行われています。

霧ヶ峰は観光のみならず、昔から亜高山植生や地理地形等の研究の対象としても注目を集めています。一方で、昔ながらの生業との関わりは薄れていますが、地域にとっては諏訪の原風景のひとつとしてかけがえのない存在であり、牧野組合等の地権者や地域住民がその風景を残すため積極的に関わりを持っているということも特筆すべきことです。



花畑プロジェクトの活動

最後に、故茅野慶次さん^{※2}が霧ヶ峰ネットワークのヒアリングの中でお話されていたことを書かせていただきます。

「植松幹夫先生が『霧ヶ峰交遊録』の中で、霧ヶ峰を訪れた人が“人生の転機になった”とか、“自分の心を洗うことができた”とこたえてくれたと書いている。霧ヶ峰の存在は、ただ地域の所有物というような存在ではなくて、すべての人間

に共通の人間の生きるための価値である、そういうような認識をしていかないといけないんじゃないか。ま、こんなように思うわけです。」

※1 静岡大学の増澤武弘先生にご指導いただきながら、地元小学生がニコウキスグ等の育苗をして、もともと改良草地だった場所を野草地化する取り組み

※2 長年教員を勤められた。霧ヶ峰に有料道路（現在のビーナスライン）の建設計画が持ち上がった際、ルート変更に尽力された。新田次郎の『霧の子孫たち』のモデルの一人。

■草原をめぐる動き（2013年4月～7月）

4/6 塩塚高原山焼き（場所：愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先：三好市観光課・塩塚高原キャンプ場）

4/7 深入山山焼きまつり（場所：広島県山県郡安芸太田町、連絡先：安芸太田町観光協会）

4/13 雲月山山焼き（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）

4/20 千町原山焼き（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）

4/20 森林塾青水セミナー「野焼きが守る生物多様性」（場所：東京都渋谷区神宮前 国連大学ビル1F、連絡先：森林塾青水）

4/27-29 「茅葺き体験会」カヤマル2013@美山砂木（場所：京都府南丹市美山町高野地区 砂木集落地蔵堂）

5/5 西の原のレンゲツツジを探そう（場所：島根県大田市三瓶山西の原、連絡先：NPO 法人緑と水の連絡会議）

5/11-12 「春の風物詩・茅場の野焼き」&「日本の原風景・春の上ノ原散策」（場所：群馬県みなかみ町上ノ原、連絡先：森林塾青水）

5/12 第14回 遊歩道づくり・第3期 スミレ観察会 その1（場所：山梨県山梨市牧丘町 乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）（スミレ観察会 その2は5/25、その3は6/8）

6/30 第11期 マルハナバチ調べ隊（初夏編）（場所：山梨県山梨市牧丘町 乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています

■第7回全国草原再生ネットワーク総会の案内

ネットワークの総会を下記のとおり開催します。総会にあわせて、関東方面の草原や保全活動の現場を見学するエクサカーションも計画しています。詳細は後日お知らせします。

【日 時】平成25年6月29日（土） 15:00～18:00

【場 所】TKP新橋ビジネスセンター

【内 容】15:00～ 総会

16:40～ 話題提供および意見交換会 ※終了後、懇親会も予定しています

【その他】エクサカーション 6/28に茨城県内の火入れ地や茅葺き住宅などを予定しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol.14 2013年4月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】3月23日に三瓶山の火入れが行われました。最後の箇所での火入れでは、迎え火が打たれず、風上から火が入れられたため、隣接する林地に火が移りそうなヒヤリとした場面がありました。このような場面が繰り返されないよう、ヒヤリ・ハット集への情報提供をお願いします。